

プライド邪魔して相談できず

配偶者や恋人から暴力を振るわれる「ダメスティックバイオレンス(DV)」。「被害者は女性」というイメージがあるが、男性が被害を受けているケースが増えている。「男らしさ」というプライドから周囲に相談できず、1人で抱え込んでしまうことも。支援窓口を増やすことが課題だ。

(中井なつみ、油原聰子)

増える男性のDV被害

妻によるDVの主な被害

精神的DV

「何もできない人間だ」などなどじられる

話しかけても無視される

「会社にはばらすぞ」など、脅しの言葉をかけられる

経済的DV

金銭的に自由を奪われ、必要なお金も渡されない



肉體的DV

リモコンや台所用品などを投げられる

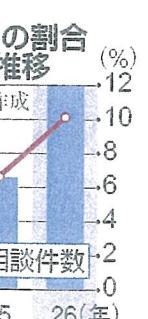
殴る、蹴るなどの暴力をふるわれる

「家にいるのが怖くてたまらない」。東京都内に住む30代の男性会社員は2年前に妻と別居した。妻からの日常的な暴力が原因だった。殴られたり、蹴られたり。「リモコンを置く位置が違う」「すぐに返事をしない」。きっかけはそんなささいのことだ。しかし、妻は一度怒り出すと感情が抑えられず、男性が出血するまで暴力をふるった。

「妻の口癖は『これだから高卒は…』。男性は卒の妻から学歴をののしらされている日々にじっと耐え続けている。妻の口癖は『これだから高卒は…』。男性は『俺はダメなんだ』と思い

「家庭内のトラブルを外には知れたくない。そん

に激増している。「家庭内のトラブルを外には知れたくない。そん



ショルターもなし

悩み、離婚も考えたが、子供はまだ2歳。「妻に引き取られる可能性もあるので一歩が踏み出せない」

警察庁の統計によると、DV被害相談件数は年々増加し、平成26年には過去最多の約6万件。うち男性の被害は約6千件(10・1%)で22年の約800件(2・4%)から7・5倍に激増している。

「男性のDV被害者の割合と相談件数の推移

※森公任弁護士、東京ワイメンズプラザなどへの取材を基に作成
「助けて」と声を上げられない状態が目立っている。」

「指摘するのは、DV被害男性らの相談を受ける森法律事務所(東京都中央区)の森公任弁護士。被害男性に自立つのは、職場や親族に知られれば男としての立場がなくなる」という意識だ。周囲にも性差に基づく固定観念が強く、男性側が被害を訴えて、「そんなはずはない」と信用されない場合も珍しくないとい

う。

男性被害者に向かって支援の充実も課題だ。女性向けの相談窓口は数多く開設されているが、男性向けは数も少なく、あまり知られていない。また、男性用の「避難用シェルター」はあるが、ほとんどないのが実情だ。

東京都が運営する男女平等参画社会の啓発活動を行う「東京ワイメンズプラザ」(涉谷区)は、13年から男性向けの夜間の電話相談を開設している。しかし、担当者は「相談に乗ることができるが、『シェルターを紹介してほしい』と言わても、男性を対象にした施設は少ない」と表情を語る。

夫婦・家族問題評論家の池内ひろ美さんは「本来、家は世界で一番安全な場所であるはず。家庭のなかのことは、被害者が声を上げなければ助ける」とはできない。男性も被害を訴えてほしい」と話している。

望む場合、何よりも必要なのは被害を立証にめぐらむの一ひと森弁護士。